

【 煉獄 奇旅 】 異世界炎聖伝説

煉獄杏寿LAW

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いまや人気を誇る鬼滅の刃の炎柱 煉獄杏寿郎が無限列車編の死後に異世界へ転生されていたら…異世界で新たな活躍をして英雄となっていく煉獄杏寿郎の冒険浪漫ファンタジーです♪

煉獄杏寿郎の奇妙な旅路を描く物語

【煉獄 奇旅】

それは彼が炎聖と呼ばれて

伝説となっていくまでの旅のお話し

目次

炎の申し子	1
始まりの目覚め	3
煉獄杏寿郎と名乗る男	6
感謝の御馳走	9
運命の出会い	14
竜との激闘	19
実感の無い勝利	26
繋がれる絆	30
新しい力と新たな旅立ち	35
情報を求めて……………	42
来訪者と鬼人族	47

炎の申し子

「いかん！ さすがに無理だ逃げろレンゴクツ」

「キョウジユロだめえええ」

「これくらいの手相をどうにか出来なくてどうする！ 俺は炎柱 煉

獄杏寿郎…炎の呼吸 奥義 玖ノ型 煉獄っ」

煉獄の突進と共に炎がほとぼしり身を包み込む

まるで炎の竜のような見た目のそれが立ち塞がる大きな敵へと突き進んでいき、ドオオオンと凄まじい爆発音と共に炎が竜巻のように燃え盛る

「レンゴクツ！」 「キョウジユロオオオ！」

おじいさんまではいかなくも年期の入ったしわが目立つ男の老人と、小さな身体で頭に角を生やした少女が叫ぶ

炎の竜巻が消えて静寂を取り戻したその場には傷だらけになりつつもしつかりと立つ煉獄の姿があった

その傍らにはドラゴンと呼ばれる存在だったものが首を切断され身体も焼け焦げて動かぬ姿で横たわっていた

「すううはああ…すううはああ…」

息づかいが荒くも煉獄は振り返り、心配をしていた二人へと笑みを浮かべたような表情で頷く

「炎を纏い戦う者…レンゴクがそうなのか？ ワシはまさに伝説の人物を拾ったとでも……」

老人はその脳裏にかつて子供の頃に見聞きした

この世界に伝わる古い話しを思い出して呟く

それは心清らかなる者が聖なる炎を纏いて

仲間たちと共に闇を打ち払うという伝説の物語

「キョウジユローー！」

小さな見た目ながらすばしっこい少女が煉獄へと走り寄る

煉獄はそれを見て頭へと手をやり大丈夫だと言わんばかりにポン

ポンとする

小さな少女の頭を撫でる煉獄の姿は淡く輝いて見える

魔法使いの老人が咄嗟に掛けた身体強化の魔法が効いているからだ

しかしそれ以上に老人には煉獄が眩しく見えた

まさに伝説を具現化して見せた戦いは老人を魅了するに値する

感動と興奮を抑えきれないのか震えが止まらぬ身体をそのままに老人はゆつくりと二人へ歩を進めた…

この世界の名はオールスト

剣と魔法が存在し、多種多様な種族が共に暮らしている

国と国の些細な面倒や小さないざこざがあればど

明らかに平和そのものに見える

しかし世界が着々と闇に蝕まれ

全てが死に絶えるかもしれないなど誰にもわからない

そんな未来が実際に迫っているのだ

そこへ突然と現れた煉獄杏寿郎

元の世界で死んだはずの彼が何故に異世界へと飛ばされ

自分の意思とは関係なくこの世界を救うために

新たな戦いへ身を投じることになるのはこれからの話である。

ただわかるのは彼こそが炎の呼吸を使い戦える者

言わずと知れた炎柱 煉獄杏寿郎

しかしこの世界ではまだ2人にしか知られてはいない。

始まりの目覚め

「ん？　ここは……」

煉獄が目を覚ますと柔らかな日差しが降り注ぐ
森のような木々が繁った風景が見える

「確か俺は死んだはず……ここは一体？」

むくりと起き上がると手足を動かさし

自分の身体を確認するように動かしてみる

「生きている……のか？　それともここが死後の世界とでも？」

確かに感じる心臓の鼓動

生きているとしか思えないことに理解が出来ない

そこへ静寂を破る突然の悲鳴が響く

「キヤアアア！」

悲鳴が聞こえたと同時に言ってもいいほどに

煉獄の身体は駆け出していた

「考えてもわからんことは後だ！」

その素早さと身軽さはさすが柱と呼ばれる精鋭

人とは思えぬ速さで悲鳴が聞こえた方へ走って行く

「来ないでっ！　イヤアアア」

「グルルアアアッ」

若い女性が叫ぶ先には熊のような動物が

今にも襲いかかるといった瞬間だった

「危ないから地面へ伏せろ！」

煉獄の大きな声はまだ少し離れているのに

しっかりと女性の耳に届いた

誰かもわからないその声を頼りに女性は地面へと踞る

それと同時に煉獄は女性の上を軽やかに飛び越え

瞬時に刀に手をかけて熊のような動物へと飛びかかる

「炎の呼吸 壱ノ型 不知火（しらぬい）」

一瞬の出来事であった

煉獄が手をかけた刀を抜いたと同時に迸る炎
飛びかかった勢いのままに斬りかかり振り抜く

着地してもザザーッとその勢いを殺しきれぬ煉獄の背後に
熊のような動物の切断された首がドサツと落ちる

続けて首を失った身体がドーンと音を立てて倒れて来る

その斬り口は焼け焦げたように黒くなり煙が出ていた

まだ刀身に残る燃える炎をブンツと振り払い

煉獄は流れるような所作で刀をしまおうと

「もう大丈夫だ！　しかしデカイ熊だな。食べ応えがありそうだ！
はーっはっはっは」

煉獄の大きな声にビクツと身体を震わせるも

若い女性はゆっくりと顔をあげて煉獄を見る

そして斬られて頭と身体に分かれた熊のような動物を見て

「えっ!?　これはあなたが?　……ありがとうございます」

聞こえた声の言うままに地面へと踞り

何秒かの間に何が起きたのか?

よくわからないままに女性はお礼を告げる

「うむっ!　気にするな」

大した事はしてないと本気で思っている煉獄が答える

「それより聞きたいことがあるのだがここは一体……グウウ」

女性へと歩み寄りながら話し始めた

煉獄の腹が鳴る音は女性にも聞こえるほどだった

「これは失礼!　はーっはっはっは」

自分でも少し驚いた煉獄が笑う

「アハハ。良かつたら村が近くにありますが寄っていかれませんか?
大したものはありませんがお礼にご飯でも作らせてください

!」

その流れに一緒に笑ってしまった若い女性は

煉獄が悪い人ではないと思いついて改めて感謝の気持ちで告げる

「ありがたいっ！ ではお言葉に甘えよう」

そう言うのと煉獄は先程の熊のような動物へ近付き

片手で頭を持ち、もう片方の手で熊のような動物の腕を自分の身体に巻き付けるようにして押さえるとズズズツと引つ張り出す

「えっ？ それ持つていくんですか？ 村に帰れば人を呼べるのに…」

女性が驚いてそう言うのと煉獄は遮るように

「いや大丈夫そうだし、これくらいなら引つ張っていける」

そう話しながらも熊のような動物を引きずり

女性の方へと近づいてくる

「…そうですか…じゃあこっちはですー！」

自分の倍以上のものを少しは重そうにしながらも

引きずり歩いてくる煉獄に驚き引き気味な女性だったが

道案内のために歩き始める

煉獄はその姿を追いつつ重い荷物となった動物を

引きずりながらついていくのであった

煉獄杏寿郎と名乗る男

少し日が傾いて来ただろうか…

村らしきものが見えてくる

「もう少しで村に着きます。ほんとに大丈夫ですか？」

若い女性は後ろを着いてくる煉獄の姿に

まだ引き気味なままで話しかける

「あれか…ああ大丈夫だ！ 思っていたより重くてきつくはなつてきたが村までもつだろう。俺もまだまだだな…不甲斐ない」

そう言つて少し笑いながら煉獄は片手の頭部を持ち直し、もう片方の手で身体に巻き付けた動物の腕を押さえ直して引きずつて歩き続ける

「私は先に村へ行き助けてもらった事を伝えて食べ物の準備をしますね！ そう言えば助けてもらったのに名前も名乗らずごめんなさい。

私はユーリです。あなたのお名前は？」

煉獄の言葉に若い女性はそう返してハッと気づいたように聞いてくる

「気にするなど言つただろう。俺は煉獄！ 煉獄杏寿郎だ」

ユーリと名乗る女性の慌てた態度と言葉に少し笑みを浮かべながら煉獄は大きな声で名乗り返す

「わっ…はいレンゴク？ 不思議な名前…じゃあ先に行つてみんなに伝えますね」

ユーリは煉獄の名前と音量に驚きポカンとしながらも

笑顔で答えて小走りに村へと向かつて行く

「うむっ！ 元気な女性だ」

煉獄はその姿を見ながら眩き、村へと歩みを進めた

煉獄が村の入り口に到着する前には既に人だかりが出来ていた

村の仲間を救つてくれた者への感謝もあるだろうが

それよりも興味だったり、悪さをしに来たのではないかという疑い

の者も居る

色々な視線が煉獄へと注がれる中で

一人の老婆が前へと歩み出る

「あなたがユーリをベアードから救ってくださった方ですか？」

村の入り口まであと僅かと近づいてくる煉獄へ老婆が話しかける

「救ったなどと大層な事はしていません！ 俺の名は煉獄杏寿郎と

申します。 熊みたいな動物はベアードと言うのか…ふむ」

そう言うのと煉獄は持っていたベアードの頭部や引きずって来た胴体を村の入り口で降ろす

もちろん誰もが自分より倍以上はあるベアードを一人で持ち引きずってきた煉獄の力と体力に驚いたが、それより名乗り部分までの声の大きさに誰もが驚いたり耳を塞いだりとざわつきが起きる

「うるせえ」「凄い声」「びっくりした」

「耳が痛い」「なんて力持ちだ」

「見たことがない格好と剣だな」

などと苦情が多いが色々な言葉が飛び交う

ざわつく村人たちを宥めるように老婆が手をあげる

「レンゴク…聞いたことない名前じゃな。ユーリを救ってくれたあなたに感謝します！ じゃがあなたはここへ何しに来なされた？」

老婆は煉獄へと御辞儀をしながら頭をあげて真面目な顔で問いかける

「…うむっ…」

煉獄は老婆の問いかけを聞いて腕を組んで呟く

「考えたがわかりません！ 俺は戦いで死んだはずなのに気づいたら森の中で寝ていた。俺自身が何故いまここに居るのかもわからない。だから答えようにもどうにもできません！ はーっはっはっは」

少し考えるもすぐに煉獄は素直に話して終いには笑ってしまう
どうしようもない

さつきまで死んだと思っていたし

ここは死後の世界かとも考えていたくらいだ

熱く真っ直ぐな煉獄らしい返答

また煉獄の大きな声や笑っている様に村人がざわつく

しかし聞いていた老婆はその煉獄の言葉を聞いて

真面目な顔が少し緩んだような顔つきになる

「よくはわかりませぬがあなたは記憶を無くされたのでしょうか？

死人がはつきり話せるとは聞いたことがないから死んではおらんでしょう。まあユーリを救ってもらったお礼もありますし…ささっ…

我が家へ！」

老婆はそう言うのと村人の数人にベアードの処理などを任せ、煉獄を我が家へと案内するため歩き出す

「死人は話さない？ その辺を歩いているとでも言わんばかりだな。

よもやよもやだ…まったく理解が出来ん！…しかし記憶が無くなっている…か…まあいい！ 今はご飯を御馳走になろう」

まるで死人が存在しているような話しや、死んだはずだと思っていたのに記憶が無くなっているのではないかと言われ煉獄でさえ呆氣にとられる

更に謎は深まるも答えが出ないものを悩んでも仕方ないとお礼のご飯への招きを楽しみに煉獄は老婆の後に着いていく

この時もう既に世界の異変は始まっていた

そしてこの村へと災厄は確実に迫って来ているのであった

感謝の御馳走

少し歩くと前の老婆が煉獄へと話しかける

「申し遅れました私はこの村の村長でサボンです。　じいさんが死んで私が引き継いでいるようなもの…　こんな何もない村ですが美味しい食事でも食べていかれるが良からうて。」

後ろから着いてくる煉獄へ

サボンと名乗った老婆が笑顔で話しかける

どちらかと言えば歩みの遅い老婆であるサボン

それを気遣ってか力強くも明らかにゆっくりと歩み着いてくる煉獄の優しさが伝わってくる

疑いを持った申し訳無さと言葉無くもわかる暖かさを

感じるからの自然と出た笑顔であった

「サボンさん…ふむ！　気にしないでください。　怪しい者と思われるて仕方ない状況だ。　本人さえよくわかっていないのだからな。　はーはっはっはっ」

煉獄はサボンの笑顔を見て答えるように

笑顔を浮かべ話し返すと自らの言葉に笑う

煉獄のその言い様と大きな声で笑うのを見て

サボンは改めてこの若者を疑う意味など

最初から無かったのだと笑顔で頷く

サビード国の外れにある村　ガラム

あまり広くもなく平和の一言で片付くようなどこにでもある小さな村の高台に

他の家屋より大きめなサボンの家があった

既に建物の台所らしきところから

モクモクと煙が見えている

サボンに指示されたユーリが煉獄のために

先に食事の支度を始めていた

「さきつ！ どうぞお入りください」

ドアを開けて中へと招くサボンの言葉に

「うむっ！ では失礼します」

軽い会釈をして答えると

煉獄は屋内へと入って行く

洋式のような家の作りに

興味でキョロキョロと見てしまう

村を歩いて来た時から

いくつかの家があったが

どれも煉獄には珍しい作りだからである

（なるほど…）

やはりここは俺の居た世界ではないのか

薄々と感じてはいた

まず自分は死んだはず…

ユーリを助けた時に倒した

熊のようだが倍ほどに大きな動物

そして村とは言えど

見たこともない家の数々

（しかし何故？）

死んだならどうしてここに居る？

考えを巡らす煉獄へ聞いた声が話しかける

「お疲れ様でした！ 村の入り口では大変だったみたいです。と

にかく助けてもらったお礼にお腹いっぱい食べていってください」

続々と出来る上がる料理を運びながら

ユーリが笑顔で話しかける

「ああきみか！ これは美味しそうだ。ありがたく頂くとしよう」

煉獄は笑顔で答えて食べようとする

「ほんと大きな声！」

「ふおっふおっふお！ 元気じゃなあ」

答えた煉獄の返事にユーリはまた驚き

サボンと顔を見合わせ笑っている

しかしすぐに笑いは収まり

何故か食べようとしないう煉獄を見て声をかける

「どうなされた？」

「気に入らなかったですか？」

二人の心配した問いかけに

煉獄はぶんぶんと顔を左右にやると

「いや…食べるための箸がない！」

煉獄の言葉に二人はキョトンとなり

「ハシ？　ハシとは何ですか？」

「よくわからないけど…フォークとナイフなら置いてありますよ」

二人の返答に煉獄も少し啞然とするも

「ふおーくとないふ…これか…しかし…」

煉獄の姿にサボンは先に食べはじめ

それを見入る煉獄の姿に少し笑ってしまう

「ふおっふおっ！　さきっ　冷めないうちに…」

サボンの食べる姿を見ていた煉獄は改めて

進められ慣れない手つきで食べはじめる

「うむ…うまいっ!!」

一段と大きな煉獄の声と食べっぷりだが

ユーリとサボンは慣れたとばかりに

二人とも笑いつつ食べるのであった

フォークとナイフにだいぶ慣れて

腹も膨れてきた煉獄の姿を笑顔で見ている二人

ユーリが片付けをはじめながら

用意した暖かいお茶を差し出す

「ありがとうユーリ。　さて…レンゴク様は何か聞きたいことがある

のではないかえ？」

サボンはお茶を飲んで話し出す

「ありがとう！ ああ…聞きたいこともたくさんあるのですが何から話したらいいものか…」

煉獄はユーリへとお礼を言うと

話しを切り出したサボンに答えようとするが

考えが纏まらないだけに言葉に詰まる

「あなた様はきつとこの世界の者ではない！ ですかの？」

サボンの話した言葉に煉獄はハツとなる

「俺もそう思います！ 俺は自分がいた世界で死んだはず。なのに

気づいたら森の中に…」

煉獄の言葉にサボンは頷きながら

「やはりそうじゃったか！ 見たこともない服装に不思議な形の剣。村の入り口で初めて見た時からもしやとは思いましたが… あなた様のように突然と現れた人の話しを聞いたことがあったもので…」

「なんと！ …俺と似たような人が…」

（もしかしたら他に隊士が居るかもしれない）

煉獄はサボンの言葉に思わず立ち上がり

大きな声が更に響いて聞こえる

「また驚いちやったフッフ。 その話しなら私も聞いたことがありますよ！ じゃあレンゴクさんは違う世界から来た人なのね。 凄いあの話しはほんとだったんだ」

片付けを終えて戻ってきたユーリが笑いながら話す

「すまない！ そうだと言っているいいものかわからないが…たぶんそうなるのだろう。 サボンさん、その話しを詳しく聞かせてください」

煉獄は落ち着いてユーリに答えながら

改めて座るとサボンへ向け質問をする

「そうじゃのう…あまり詳しくは知らんのですが何人かこの世界に突然と現れた人がおるとい話しを聞いたことがあるのですじゃ。 それに詳しい者が村の外れに住んでおります！ 呼んで来させましょう」

サボンはユーリへと声をかけると

ユーリは頷いて素早く家から小走りに出て行く
向かう先には小さな小屋といった感じの
古びた建物に住む人物を呼ぶためである
この人物、そして一緒に住む小さな女の子が
これからの煉獄と運命を共にする事になるのである

運命の出会い

「ゼノさん！ ゼノさん?? いないのー?」

ドアをノックしてユーリが問いかける

少し間をおいて静かにドアが開くと

小さな女の子が顔を出す

「ゼノ…寝てる…起こす?」

ドアを開けて出てきた小さな女の子

頭には小さな角が生えている

その子を見てユーリは微笑み話しかける

「マズルちゃん、ゼノさん起こしてもらってもいい?」

ユーリの言葉にマズルと呼ばれた少女は頷き

部屋の奥へと歩いて行くと固めのベッドに寝ている

初老の男ゼノの身体を揺すつて起こす

揺さぶられたゼノは目を覚まし

わかったわかったとマズルの頭をポンポンとすると

ゆっくりと起き上がり入り口へ歩いてくる

「なんだユーリか! どうしたんだ一体?」

まだお爺さんとは言えぬ初老の見た目な男ゼノ

少し眠そうではあるがユーリへと話しかける

「サボンさんが呼んでますよ! 私が森でベアードから助けてもらった人が来ていて…たぶんあの違う世界から来た人みたいで…」

ゼノの言葉にユーリがそう答えていると

目を見開きすぐに言葉を遮る

「なんだ?! そいつが今居るのか?」

ゼノは驚いて大きな声で聞き返す

それを聞いていたマズルがビクツと驚く

「はい今はお礼の食事を終えて話しを聞きたいと! だから詳しいゼノさんと呼んで来てとサボンさんが…」

動揺して聞いてくるゼノにユーリも少し驚いたが
そのままに答えているとまたゼノに遮られる

「それを早く言わんか！ ちょっと待ってくれ」

ゼノはそう言うのと部屋の奥へ行き

魔術師のローブのような服装に着替えると

杖を持ち出て行こうとする

「ゼノー」

そう言っつてローブの裾を掴むマズル

そんな小さな少女を優しくゼノは頭を撫でる

「大丈夫だ！ どこかに行く訳じゃない。 マズルも来るか？」

穏やかに話すゼノの言葉にマズルは頷く

「じゃあ行こう！」

ゼノはマズルの手を引いて

先を歩くユーリに着いて行つた

煉獄とサボンが先の話しを交えて会話をしていると

ドアが開いてユーリが戻って来る

「ただいま戻りました！ ゼノさん連れてきましたよ」

その言葉に煉獄とサボンが声の方へ向く

「村長！ お邪魔するぞ」

ユーリに続いて初老の男が入ってくる

その男の手に引かれて小さな少女が入って来た

その少女を見た瞬間、煉獄の表情が変わり

すぐさま傍らに置いていた炎刀を持ち

「ここにも鬼がいるのかー」

明らかに豹変した煉獄の有り様を見て

サボンとユーリは驚いて訪ねる

「どうなされた？」

「何？ どうしたのレンゴクさん」

二人の言葉を聞いても煉獄は少女を睨んでいる

「ううー」

「ほらほら大丈夫だ」

睨みつける煉獄の姿に怖がってゼノの背後に隠れるマズル
それを宥めるようにゼノは言うと

「若いの！ その剣を置いてくれないか？　なんでマズルに敵意を向けるのかは知らんがこの子は理由あってワシが面倒を見てるんだ」

ゼノの言葉を聞くとマズルという鬼の少女を見て

動揺していた煉獄は落ち着きを取り戻す

「すまない…俺の居た世界では鬼と戦うことが使命だっただけにその子の角に反応してしまった。」

そう言つて煉獄はゼノに頭を下げると

背後に隠れているマズルにも詫びを入れる

そう自分がいた世界の鬼とは何かが違うのだ

殺気も感じなければ敵意も感じない

まるで死ぬ前に共に居たあの少年の妹のように

人の温もりさえあるような……

サボンとユーリも一瞬の緊張感が消え去り

ひと安心と息をつく

「お茶を入れてきますね！」

「まあまあみんな座りなされ」

サボンの言葉に煉獄は持っていた炎刀を

改めて壁に立て掛けてイスへと座る

続けてゼノもイスへと座り

隣にマズルも座らせる

すぐにユーリが用意したお茶を飲んで

煉獄は改めてゼノへと挨拶をする

その大きな声に二人は驚き、それを見て二人は笑う

「しかしこんな村に来訪者が来るとはな…」

ゼノは煉獄を凝視しながら呟く

先程のことに煉獄を怖がっていたマズルも

今は興味津々と煉獄を見ている

「来訪者…そう呼ばれるのか。ゼノさん聞かせてもらいたい！俺のようなその来訪者は何人も居るのか？」

煉獄はゼノへと問いかける

「ゼノでいい！レンゴクと言ったな。ああ会ったことは無いが確かに他にも何人か居ると聞いている。しかも特徴はおまえに似た見たこともない服装と不思議な形の剣と言う話もある。その者たちはオールストの各地に居るらしいぞ」

ゼノはそう話しながらマズルの頭を撫でる

「では改めてゼノ！その者たちに会いたいんだがどうしたら…」

ゼノの言葉に煉獄はすぐに答えようと話し出す

「ゼノ…何か…来る！」

煉獄の話しの途中でマズルが急に喋り出す

マズルの言葉と同時に森やその先から来たのか
大量の鳥たちが村の上を通過していく

異変を感じて煉獄は素早く窓を開けると

夜になりかけた空を真っ黒に染めるような

大量の鳥たちが飛び去って行く

どこからか地響きに近い

大量な動物たちの移動する足音も響いていた

「なんだ？何が起きている？」

煉獄がそう呟くと

「悪い知らせだ！こんなところに居るはずのないやつが向かって来ている」

ゼノは話しながら持つて来ていた杖の先を

クルクルと回して覗き込んでいる

「いかな…村長、アースドラゴンが近づいている。今ならまだ間に合う！すぐに村の者を連れてここから離れろ」

ゼノの言葉にサボンとユーリは顔が青ざめる

「なんだと言っている！」

異変を感じながらも落ち着いて

しかし力強い圧のある声で

煉獄が話しているゼノへ問いかける

「ドラゴンだ！ レンゴクの世界では…何と言えかわかる？」

その怖くも熱く漲る煉獄の言葉にゼノは答える

「リユウ…」

マズルはレンゴクを見上げて話す

「童？ あれは伝説の…いや違うこの世界では存在しているのだな！」

ふむっ…時間稼ぎが出来るかわからんが俺が行く」

煉獄の理解と判断は早かった

話しながらすぐさま炎に見える羽織りをバサツとはらうと

壁に立て掛けてあつた炎刀を腰へと差し入れる

その華麗な様にマズルは見入ってしまうほどだった

竜との激闘

「ばかやろう何を言ってる！ あんなのはワシら魔術師が束になってどうにか出来るくらいだ。 おまえ一人が行っても無駄死にするだけだ。」

杖の先をクルクルと回して遠くを見渡せる魔法で

アースドラゴンの様子を見ていたゼノが一喝する

「そうじゃ！ 共にここから逃げましょうぞ」

「ゼノさんの言う通りです！ ドラゴンなんて見たことはないけどアードなんか比べ物にならない大きさで町や都市を焼き払うって聞いたことがありますから。」

ゼノに続いてサボンやユーリも煉獄へと話しかける

そして煉獄を怖がっていたはずのマズルが

煉獄へと近づいて羽織りの裾を掴んで

「ドラゴン…怖い…ダメ…」

そう話すマズルの姿に驚いたのはゼノであった

（マズルが…初めてあつたばかりの相手に？

レンゴク…この若造面白いな！）

煉獄は膝をついてマズルの頭を撫でる

忌み嫌っていた滅ぼすはずの敵対していた鬼

違う世界ではこんな小さな鬼の少女が

怖がらせてしまった初めて会う自分を

心から心配してくれていることに胸が熱くなる

煉獄はマズルの頭の小さな角も一緒に撫でながら

「ありがとう！ しかし俺は行く。 村のみんなが逃げる時間がどれ

くらいあるかわからないんだ。 少しでもその時間を稼げるなら行

く意味はある。 俺がどんな理由でこの世界へ来たのかはわからない。

だが人を助けることはどちらの世界だろうと変わりはない。

「今は村のみんなを守るために行くだけだ！」

マズルへ、そしてサボンやユーリへ

煉獄の力強く暖かい言葉が響く

「こいつは何言ってもダメだな。ワシも行く！ 村長には世話になってるからな」

ゼノはそう言うも少し笑みを浮かべている

「レンゴク…」

撫でられながらも心配そうに見てくるマズル

「大丈夫だ。きつとみんな助かる…助けてみせる！ 俺は柱…煉獄杏寿郎だからな」

煉獄はマズルへと笑顔で話して聞かせる

「ハシラ…キョウジユロ…」

その言葉にマズルは笑顔を見せて呟く

「うむっ！ では行くでしょう」

煉獄はスツと立ち上がり足早にサボンの家を出ていく

「ありがとうございます！ どうかご無事で…」

「レンゴクさん気を付けてくださいね！」

背後からサボンとユーリの声がすると

煉獄は立ち止まり少し振り返ると笑顔で頷く

既に何かの呪文を唱えながら

ゼノが煉獄の後に続き歩いて近づくと

「さあ…飛ぶぞー！」

ゼノがそう言って立ち止まっていた

煉獄の肩に手を置く

「飛ぶ？ いったい…」

煉獄はゼノの言葉を不思議に思い訪ねようとする

それと同時にサボンの家から飛び出してきた

マズルがゼノへ飛び付く

「なんだと？ このばかたれが…」

ゼノがそう言った瞬間に三人の身体が光に包まれ
その光はフワツと浮き上がる
そして凄い勢いで飛び去って行った

ドンツと言う衝撃音と共に光は消え去り
村から少し離れた場所に三人の姿はあった
暗がりの森の奥の方からドシンドシンと
地響きのような音が近付いて来ている

「なんだ今のは？ 何が起きた？」

「落ち着け！ 今のは移動魔法の一つだ」

驚く煉獄に対して冷静に話すゼノ

「しかし…マズル、なんで着いてきた？」

「ゼノ…キョウジユロ…」

マズルの言葉に溜め息のように息を吐き出し

ゼノはマズルの頭をポンとする

「移動魔法？ 魔法とはなんだ？ 一瞬に近い速度で村から離れる技
とはいったい…」

ゼノの言葉にまだ動揺している煉獄が呟く

「あーまずは魔法から説明しないとだめか！ とにかくそれは生きて
帰れたら後でゆっくりと説明してやる。今はまずアースドラゴン
とそれに引っ付いてきたのをどうにかするのが先だ。…マズルは離
れて隠れてろ」

ゼノは煉獄の呟きを聞いて

めんどくさそうに答えながら

マズルに自分たちから離れているように告げる

「うむっ！ では後で話しを聞かせてもらうとして今はこちらに集中
する」

煉獄はゼノの言葉に話しながら

心配そうに見ているマズルへと頷いて見せる

(全集中)

煉獄の姿がいきなり消えたように居なくなると
少し離れたところへと現れる

「なんじゃ？ あいつ魔法が使えるのか？ レンゴク！ アースドラ
ゴンだけじゃない。 回りにいくつか余計なのが居るはずだ気を付
けろ」

煉獄の有り様に驚いたゼノだが

すぐに警戒しろとの指示を含めて叫ぶ

「承知した！ ならば向かってくるものは斬るまでだ」

叫ぶゼノからの声に煉獄は答える

ほどなく闇に包まれた森の中から

キーキーと鳴く声と共に

勢いよく何かが飛び出して来る

煉獄へと突っ込んでくるその生き物は

バサツと目の前で腕のような翼を広げて

急上昇しようとしながら足の鋭い爪が煉獄へ迫る

「炎の呼吸 弐ノ型 昇り炎天 (のぼりえんてん)」

瞬時に炎刀を抜き放ち、沸き上がる炎を刀に纏わせ

下方から上方へと円を描くように切り上げる

「ギーー」

その生き物は煉獄に真っ二つに斬り裂かれて

勢いのままに地面へと打ちつけられる

(この生き物は？ まだ居るな)

煉獄は刀身に炎を纏わせたままに

次々と飛び出てくる謎の生き物を斬り倒していく

「周りに居たのはワイバーンか！ しかしなんじゃあの魔法は？ 攻
撃付与の魔法じゃ火は出んはず。 属性効果か？ とにかく何とい
う強さと身体能力だ」

遠巻きに見ていたゼノは煉獄の戦いを見て眩く

そしてゼノから少し離れたマズルが眩く

「リュウ…来る…」

ドシーン ドシーン

森よりも大きな巨体の足音がすぐそこに聴こえる

「ガオオオーーー」

鼓膜が痛いくらいの咆哮が目前に鳴り響く

ワイバーンと呼ばれる小型の飛竜の6匹目を斬り終えた煉獄の前から熱風のような凄まじい風が吹き荒れる

その勢いに煉獄はバックステップのように

ザツザツと音を立て素早くゼノの近くまで後退する

「いいか来るぞー！」

「竜とやらか…」

「……」

ゼノの言葉に煉獄が眩き

少し離れたところから見ているマズルは息を飲む

ドーン バキバキバキツ ドドーン

木々を薙ぎ倒しながら大きな巨体が現れる

暗がりから出てきたそれを例えるなら

蛇の身体に手足が生えて頭に大きな角が二本ある

やや赤茶色のアースドラゴン

その視界に煉獄たちを捕らえて足を止めると

「ガオオオー」

改めて強烈な咆哮が熱風と共に煉獄たちへと放たれる

「なるほど…これが竜！ ドラゴンというやつか。」

「くそっ！ まさか準備も無くドラゴンと向き合うことになるとは

な」

煉獄とゼノは互いに眩き、すぐさま煉獄が動く

瞬時に煉獄の身体は四肢で歩くアースドラゴンの

左前足へと向けて斬りかかっていた

消えていた炎刀の炎が改めて燃え上がる

「炎の呼吸 参ノ型 気炎万象（きえんばんしょう）」

ガチーン ガツガツ ザクツ

振り上げて上段から斬り降ろす形の技を

アースドラゴンの身体が弾く

弾かれながらも押し込み斬りつけて

皮膚に小さな傷をつけるのがやっとなった

「なんだと！ ぐあつ」

その状況に驚いた煉獄へ

身体を回転させたアースドラゴンの

尻尾がぶつかり吹っ飛ばされる

そしてゼノへ向けてドラゴンの息吹のように

口から吹き出した石つぶてが雨のように飛んでくる

「レンゴクっ！くそつたれがああ」

ゼノは煉獄が吹っ飛ばされるのを見て

防御魔法の詠唱をしようとするも

自分へ向けて飛んでくる石つぶてに對して

仕方なく違う防御魔法を唱える

「間に合え！ アースウォール」

地面から岩が飛び出して壁となり

石つぶてからゼノを守る

アースドラゴンに吹っ飛ばされた煉獄は

少し離れた巨木へと打ちつけられるも

すぐに身を起こすが膝をつき血を吐いてしまう

（内蔵がやられたか…まだ動けるがしかし…）

呼吸を整えながらゼノの魔法を見る

（あれも魔法というやつか！ 多様性に優れているが…守ってばかりじゃどうにもならない…ならば）

煉獄は立ち上がるとゆっくり歩を進め
深く呼吸を繰り返す

（斬れない訳じゃない…力が足りないなら俺の全てを持ってぶつかるのみ。あの二人も守れないなら俺が今ここに在る意味はなんなのだ？ 心を燃やせ！ 更に限界を越えろっ）

…バーン……

歩を止めた煉獄の身体から溢れるような炎が目に見えるオーラの如くメラメラと燃え盛る

「なんだと？ あの姿は……」

ゼノは煉獄の姿を見て子供の頃に聞いた
遙か昔からの伝説の話しが脳裏に過る

「キョウジュロー！」

離れていたマズルも何かを感じたのか
煉獄の方へと走り出す

ゼノを攻撃していたアースドラゴン
空気が変わったのを感じとり煉獄へと向き直る
そして視界に映る煉獄の姿を見て

「ガオオオー」

また咆哮をあげると煉獄へと向かって行く

ドシーン ドシーン

「いかん！ ……ロンドアート」

ゼノはそれを見てすぐに煉獄へ身体強化魔法を唱える

不思議な光が煉獄を包み暖かさと同時に力が沸いてくる

「さあ来いドラゴンッ！」

煉獄は向かって来るアースドラゴンへ向けて

叫ぶと同時に身体を捻り炎刀を構える

実感の無い勝利

感動と興奮で身体を震わせながら歩み寄っていたゼノ

「むう…いかん！　すぐに村へ戻るぞマズル」

煉獄のその姿にマズルへと声をかけると
すぐに移動魔法の詠唱を始める

「キョウジュロ…だいじよぶ…だいじよぶ」

ゼノの言葉に頷いてマズルはすぐに煉獄の腕に抱きつく
そして差し出されたゼノの手を握る

「……ルーラ……」

ゼノが眩くと三人の身体は光に包まれ
ガラムの村へ向けて飛び去って行った

「んっ…んっ…は…？」

煉獄が目を覚めたのは既に日が暮れ始めた頃だった

「おお目が覚めたか！　大活躍じゃったからのお」

そばに居たゼノが手に持った酒を飲みつつ

笑顔で煉獄へ声をかける

「すまない意識を無くしていたとは…不甲斐ないな」

煉獄は戦いの後に膝をついたとこまでは覚えていたが

その後の意識があまり無いことに苦笑いをする

「気にするな相手はあのドラゴンじゃ。　五体満足で生きて帰れるだけ
で充分なのにおまえは一人で倒しよった。　ほんとに凄いことな
んじゃからな！　おかげで村はお祭り騒ぎだぞ」

ゼノは酒を飲み干しながら

陽気に煉獄へと話す

「それは良かったっ！　はーっはっはっはっ」

ゼノの言葉に煉獄はほっとするも

とにかく良かったと笑い飛ばす

しかしあの戦いで内蔵を痛めたはずなのに
まったく言っていないほど腹の内どころか
身体に痛みが無いことを不思議に思う

そんな煉獄を見ながら

ゼノはおかわりした酒を飲みつつ

「ほんとに大きな声じゃなあ！ なんじゃ？ まだどこか痛むのか？
ワシは回復魔法はあまり得意じゃないのでの」

「いやもう大丈夫：回復魔法？ あの一瞬で移動したり土壁を出した
りしたような術の一種か！ 確か竜、いやドラゴンと戦った時にも不
思議に力が湧いてくるような… 怪我を治すようなものまでであると
は」

煉獄はゼノの言葉にハツと思いつ

元の世界の死ぬ前に戦った上弦の鬼の

凄まじい回復力が頭をよぎる

「あれは身体強化魔法。 おまえのフルパワーを引き出してそれ以上
の能力を出せるようにするものだ。 魔法はこの世界の精霊など全
ての根元から力を借りて行う術みたいなものさ」

何かを考えているような煉獄へ

問いに答えるようにゼノは話しをする

「おまえも火の精霊の力を使った魔法を使っていたのか？ それにし
ては火を身に纏うなんてのは見たことも聞いたこともないが、」

続けてゼノは煉獄へと逆に問いかける

「魔法？ いや俺はそんなものはいない。 俺が使えるのは炎の呼
吸：修行の末に奥義まで使えるようになったがまだまだだな」

煉獄はゼノの問いに答えるも

最後は自分の至らなさに強く拳を握る

「魔法が使えない？ 炎の呼吸じゃと？ 聞いたこともないが：とな
るとやはりおまえは……」

煉獄の話しに困惑するゼノは

やはりあの伝説の話しに出てくる

炎の勇者が頭にちらつく

コンコン… ガチャッ

「ゼノ！ レンゴク様の具合は…おお目が覚めましたか」

「レンゴクさんは大丈夫ですか？ あっ！起きてる良かった」

村長のサボンとユーリが様子を見にやって来たのだった

「あーもう大丈夫だ。ほらレンゴク村のみんなが待ってるってよ！

さしてワシも酒のおかわりを…」

ゼノは見に来た二人へ話して

そのまま煉獄へと話しを振ると

酒のおかわりをもらいにと外へと出て行く

「うむっ！ もう大丈夫です。 迷惑をかけてしまいすいません」

煉獄はゼノの言葉に返事をして起き上がると

ベッドから立ち上がり二人へと頭を下げる

「いやいや無理はなさらずに！ なんせあのドラゴンを倒したとか？

討伐隊みたいな大人数でなら聞いたことはあるがまさかレンゴク

様が一人で倒したとゼノから聞いて村中が驚いてまして…」

煉獄の行動に驚き話すサボン

「レンゴクさんはほんとに凄いよね。 私も助けてもらって村も守っ

てくれて… もう村の英雄よ！ みんな喜んでお祭り騒ぎなんだか

ら

サボンに続けてユーリが興奮して話す

これこれとサボンがユーリへ

苦笑いしながら注意していると

「俺もまだまだ実力が足りませんでした。 きつとゼノがいなければ

勝てなかったかもしれない！ 彼の魔法という術のおかげです」

二人へ向けて煉獄は少し苦笑いのような表情を浮かべ

明るく振る舞うも悔しそうに拳は握りしめられていた

「…さあ村の者もレンゴク様に謝りたいのとお礼も言いたいらしく！

たくさん御馳走も用意しましたので参りましょう」

「さあさあレンゴクさん」

サボンとユーリはそんな煉獄に

心から感謝と少しでも元気付けたい思いに溢れ
煉獄を外へと連れ出そうとする

「はいっ！ ではありませんがたく頂戴します」

二人の暖かい気持ちに煉獄も感謝し

後を追いつき出す

「そう言えばあの鬼の少女は？」

ふとしないマズルを気にかけて煉獄が問う

「ああマズルちゃんならレンゴクさんと一緒に戻って来てからずっと
寝てるのよね！ ゼノさんも寝かせとけて」

煉獄の言葉にユーリが答える

（ ふむっ！ 無事ならば問題はないか ）

煉獄はユーリの言葉に頷いて歩みを進める

二人とともに煉獄が村の広場へ行くと

その姿を見た村人たちから拍手と歓声が起こる

今度は感謝や好意の気持ちが溢れる

居心地の良い空気に満ちた

煉獄のための細やかな宴であった

繋がれる絆

(むっ…寝てしまっていたか…)

村長サボンの家で寝かされていた煉獄

目を覚まし起き上がると静かに外へと出て行く
まだ朝も早く日が昇って来ているほどの時間

(あの竜に俺一人じゃ勝てなかった…)

ゆっくりと歩を進めながら煉獄は考える

(ゼノの魔法があつたからこそ勝てたものだ)

(奥義 煉獄があればという考えは捨てろ)

(俺はもつと…もつと強くならなければ！)

煉獄は自分を責めて、そして更なる活を入れる

村の中央まで歩いて来たところで

朝日を浴びて立っている女の子に気がつく

(あの鬼の少女？ いや違うな)

煉獄は雰囲気からマズルかと思うも

それにしてはかなり成長した感じの後ろ姿に
違う別の少女だと思い直す

その少女が人の気配に気付いて

ゆっくりと振り返ると

どこか見たことがある気がする煉獄だった

「キョウジュロ！ おはよう」

少女の言葉に煉獄は言葉を失う

明らかに動揺している煉獄へ

その少女はゆっくり近付いて行く

「こりやマズル！ まだ出歩いちゃいかんと言うたろうが」

少女から少し離れたところから
煉獄が聞いたことのある声が聞こえる
その声に少女も振り返ると
話しながら近付いて来たゼノの姿があった

「ゼノ！ …この少女はいったい？」

やっと言葉が出た煉獄は

現れたゼノへと問いかける

「わからんのも仕方ないな。 マズルじゃよ！」

少し笑いながらゼノは答える

「なんだと！ …あんな小さな少女が…」

ゼノの言葉に煉獄は驚き話す

「朝っぱらからうるさいのう」

煉獄の驚いて話す大きな声にゼノは耳を押さえ答える

その二人を交互に見て少女は笑うと

「キョウジュロー…マズル…」

少女は自分を指差して話す

「どういうことだ…何故こんなに大きく…」

マズルの言葉と行動に

煉獄は訳がわからず動揺が止まらない

「血じゃよ…」

ゼノの言葉を聞いて煉獄の目つきが変わる

(血だと？ やはり鬼だから誰か村人の血を…)

鋭くなった煉獄の目つきに

ゼノは何かを察したように笑うと

「おまえじゃよ！ レンゴクの血を飲んでマズルは成長したんじや」

「なんだと！ 俺の血？ どういうことなんだ？」

ゼノの言葉に煉獄の雰囲気は一気に変わる

まさにキョトンとした感じになっていた

「おまえの世界ではどうか知らんが、こちらの世界での鬼は神の使いとされている。鬼人族、別名が鬼神族じゃ！女ならば巫女みたいなもんだな。その巫女が認めた者の血を飲むと一晩にしてある程度の成長をし、その相手の能力を自分の能力としても使える用になるんだ」

煉獄はゼノの言葉を聞いて理解はするも

やはり驚きは隠せずにいる

「鬼神族…神の使い…」

煉獄は改めてマズルを見ながら呟く

わかりやすく言うならば

煉獄が出会った時は小学1年生

しかし今の見た目は中学2年生ほど

肩まで無かった短めの黒髪も

今は長く胸の辺りまで延びて

所々に赤色が混じっている

目の色も煉獄と同じような赤い目になり

マニキュアを塗ったような赤い爪

そして小さく白かった角が

今は少し大きく赤色に染まっていた

その変わり様はまさに誰もが驚くほどであった

「キョウジユロ…マズルも戦える！」

マズルは嬉しそうに煉獄へと話す

「レンゴク！おまえはマズルに選ばれたんじゃ」

マズルの言葉に続けてゼノが話しはじめる

「マズルはの今は数少ない鬼人族の一人だな。たぶん鬼人族を捕まえようとする悪い輩からマズルを守って力尽きた両親の屍に泣きついていたのをワシが拾って育てていたんじゃ」

ゼノは思い出しながら煉獄へと語り聞かせる

その言葉にマズルは俯く

「鬼人族のことは知っていただけに相手を選ぶのはマズル本人と思っていたが…まさか来訪者のレンゴクを選ぶとはな」

ゼノはそう言いながらマズルを見ると続けて煉獄を見る

「鬼人族に…いやマズルに選ばれると言うのはどういうことなんだ？」

ゼノの話しを聞いて煉獄が問いかける

「まずおまえが強くなってるはずだ！ 力も身体も昨日までの数倍はな。そしてマズルはレンゴクに似たような力を使えるようになっただろう。 どういったものかは見てみないとわからんが必ずおまえの役に立つものじゃろうな」

ゼノの言葉を聞いて煉獄はハツとする

そしてマズルの方を見るとマズルは笑顔で頷いて

「キョウジュロ…もつと強く…言ってた」

マズルは笑顔のまま話し

少し俯くとその頬に涙が流れる

「マズルの両親…死んじゃった…マズル…キョウジュロが死ぬはイヤ！ だからマズル…キョウジュロと一緒に…戦うの」

マズルはぼろぼろと流れる涙をそのままに

笑顔で煉獄へと話しかける

それを見て煉獄は胸が熱くなる

そして改めて元の世界で共に戦った

鬼の妹を持つ少年を思い出す

（ 竈門少年…君の気持ちや暖かい思い… ）

（ 今なら俺もわかる気がするぞ！ ）

そんな煉獄を見ながらゼノは

マズルへと近寄り頭を撫でながら

「レンゴク…ワシはおまえがここへ来たのには何か理由があると思う。それもかなり重要なことだな。そしてそれはおまえの力にも関係していると思うんじゃない！ とにかく他の来訪者に会いに行

くのじやろ？ ワシもマズルも付き合うぞ」

ゼノは言いながらにやりと笑う

それを聞いて泣き止んだマズルも笑顔で頷く

二人の言葉や仕草に込み上げるものを感じ

煉獄は涙腺がじんわりとするも

「まったく…俺が知らないところで二人だけで話しを進めているとは

！ よもやよもやだ。 ならばありがたく付き合ってもらおう」

煉獄が笑顔で言い切り歩き出すと

マズルはうんと笑顔で頷き喜んで着いていく

そしてゼノはふっと笑みを浮かべ

二人の後を追って歩き始めた

新しい力と新たな旅立ち

「では…ありがたく頂きますっ！」

「ふむ！ 頂くとしよう」

「頂きます」

煉獄の言葉から始まり

ゼノ、マズルが続いて食べ始める

三人の姿は村長サボンの家にあつた

「レンゴク様ならわかるが…何故にゼノやマズルまで一緒に食べる
来てるのかねえ」

それを見ながら暖かいお茶を飲んでちよつとした嫌みを混ぜつつ
サボンが話す

「うむ…やはりうまい…うまい…うまい…うまい…うまいっ！」

「うるせえレンゴク！ すまんの…しかし美味いご飯で朝から元気に
なるというもんだ」

「美味しい…ありがとう」

煉獄が元気に食べ誉めるのを一括して

ゼノが話すとマズルが続けて感謝を口にする

「まあまあ！ でもいつの間にもレンゴクさんとこんなに仲良くなつて
るなんて。 マズルちゃんもいきなり大きくなつちやつたし…驚く
ことばかりです」

サボンと煉獄の朝食を作りに来たユーリだったが、状況に笑いなが
ら話して自分も暖かいお茶を飲む

「ふむ！ わかりました。 ではすぐに出発なさるので？」

サボンは食べ終えた煉獄や

ゼノから話しを聞いてそれに問い返す

「いや…もう少しこちらに居させてもらいたいのですが…」

サボンの言葉に煉獄が切り返して答える

「んっ？ どうした？　すぐに他の来訪者を探しに行くんじゃないか？」

煉獄の切り出した言葉を

不思議に思ったゼノが口を挟んでくる

すると煉獄は少し考えてから改めて口を開く

「うむ……正直すぐにでも向かうつもりだった。一人なら！　だがゼノやマズルも一緒に行くとなると尚更に二人を守り通せる力が欲しい。ゼノから聞いた話で強くなっているとしても実感が無い。それだけに少しでも修行する時間があれば……マズルの力も知っておきたいからな」

煉獄の言葉にマズルは笑って頷く

ゼノは笑みを浮かべると

「嬉しいこと言ってくれるなあ！　まあ魔法使いのジジイが守られるってのもおかしなもんじゃがな」

冗談混じりに茶化して話すも

嬉しそうな気持ちが溢れているのがわかる

煉獄は二人の態度に笑顔を見せると

「そう言った理由ですみませんがもう少し迷惑をかけると思います！」

聞いていたサボンやユーリへと

話しながら丁寧に頭をさげる

そのやり取りを見ていたサボンとユーリ

互いに顔を見合わせて笑顔になると

「レンゴク様の好きなように……村人の誰もがあなた様の滞在を歓迎するだけですじゃ」

「もちろんです！　そうと決まったら毎日のご飯は喜んでもらえるよう頑張らなきゃ！」

この心まで暖まる新しい大切な居場所を

改めて守りたい、だからこそ必要な

自分を鍛え直すための時間だと

煉獄は微笑みながら思うのだった

そして月日が立ち：

煉獄がオールストへ現れてから

既に半年が立とうとしていた

ゼノがサポートをしながら

煉獄、そしてマズルも修行をする日々

それはゼノにさえ修行にもなり

使える魔法は精度を増して

新たな魔法も会得するほどであった

煉獄とマズル

二人はそれほど過酷な修行をこなすまでに

明らかなる成長を遂げていた

ズズーン……………

ゼノが魔法で作り上げた岩の巨人が

マズルに足を壊されバランスを崩し

煉獄に胴体から真つ二つに焼き斬られ

凄まじい音と共に大地へ倒れバラバラになる

「ふー！ もう魔力切れじゃ。休憩させろ」

「ふうふう……………もう疲れたのかゼノ？」

「マズル…まだ大丈夫」

地面に座り込んで話すゼノへ

歩いて近寄ってくる煉獄とマズルが話しかける

「まったくおまえらの加減知らずに付き合ってたらこっちの身が持た
ん！ しかし煉獄はもちろんだが…マズル！ 強くなったのう」

ゼノはあきれたように話すも

嬉しそうに話し返す

「強くなつた…マズルわからない…けど…キョウジユロやゼノと一緒に戦えるなら…役に立つなら嬉しい」

ゼノの言葉に喜びながらも

もつと強くなりたいとばかりに話すマズル

そんなマズルの頭をポンポンとしながら

「マズルは良く頑張っている。強くなっているのも本当だ。だからしっかりゼノを守ってやらないとな」

煉獄が笑いながら話すと

ゼノはまたあきれたような仕草をして

マズルはそれを嬉しそうに笑っている

(確かに自分でも驚くほど強くなっている！)

(マズルの不思議な力が俺に更なる力を与えてくれた)

(会得出来ていなかった呼吸に加えて他にも)

(まだまだ強くなれるかもしれないが頃合いだな)

何かを考えていた煉獄を見てゼノが話しかける

「行く気になつたか？」

ゼノは笑みを浮かべながら煉獄へと問う

「そうだな。もう充分とは言えないがきつと今ならあのドラゴンを

一人でも倒せる！ それ以上の強い相手が現れても今の俺たち三人なら何とか出来るはずだ」

ゼノの言葉に煉獄も少しの笑みを浮かべ答える

その言葉には二人の仲間を信頼していると

言わんばかりに力強いものだった

マズルもその言葉に満面な笑顔で頷き

ゼノはやれやれとしながらも

その顔は嬉しそうな笑顔だった

準備は整った

不安要素であつたものは無くなり

三人の絆も更に深まったと言い切れる
無駄なものはない

全てが新たに踏み出す一歩へと繋がっている

煉獄は沸き上がるような力を感じながら

自然と笑顔になる顔をそのままに

尻餅をついているゼノの側へと歩み寄る

マズルも同じようにゼノへと近づくと

ゼノはゆつくりと呪文の詠唱を始め

程無く三人の身体は光に包まれて飛び去った

「明日には発とうと思いますっ!」

がラム村へ戻ってからサボンの家で夕飯を食べていた

煉獄が勢いよく切り出す

「うるせえなあまったくー!…という訳みたいだな」

皆が突然に発した煉獄の大きな声に驚く中で

ゼノが文句を言いつつ、サボンやユーリへと話す

「そっか…レンゴクさんが居ないと静かになっちゃうなあ」

「いよいよですか…村の者も寂しがるでしょうて」

ユーリに続けてサボンも寂しそうな笑顔で話す

「サボンさんやユーリ、そして村の皆さんにもたくさんの恩があります!
また俺も会いたいから必ず戻って来ます」

煉獄は笑顔で二人の言葉に答える

ゼノはそれを笑みを浮かべて見ていると

「わたしも…頑張る!」

笑顔のマズルが話しながら頷くのであった

翌朝、ガラムの村の真ん中に村人全員が集い

笑顔の者や半べそをかく者など色々な人たちが

煉獄を見送りたいと出発を待っていた
サボンの家から煉獄を先頭に

出てきた三人へ言葉がかけられる

「楽しかったぞレンゴク！ また来いよ」

「レンゴク気を付けろよ！」

「レンゴク兄ちゃんまた来てね」

「身体を大事にするんだよ！」

色々な言葉がかけられる中で

半年前のような言葉どころか

もはや村の仲間と言わんばかりに

たくさんの暖かい見送りであった

「皆さんありがとうございます！ 俺はまた戻って来るので皆さんもお元気で」

煉獄は村人たちへしっかりとしたお辞儀をする

飛び付いてくる子供たちに笑顔で頭を撫でたりとする

「ばいばいレンゴク！」

「レンゴク兄ちゃん元気でね」

「必ずまた来てよ！」

寂しがりながらも見送ってくれる

子供たちへ向けて煉獄は笑顔で

「ああもちろんだ。 バイバイっ！」

とびきりの大きな声で答える

大人たちがその声に驚きながらも笑うと

子供たちも笑顔で手を振る

「さて行くぞレンゴク」

やれやれとするゼノが呪文の詠唱を始めると

マズルがゼノの手を繋ぎ

もう片方の手を煉獄へと差し出す

「うむっ！ 行こう」

煉獄は眩くとマズルの手を握る

三人の身体は光に包まれて
凄い勢いで飛び去って行った

情報を求めて……………

ざわざわ、ざわざわ、

「これは……かなり賑わっているようだな！」

煉獄は大量に見える人々の姿に驚くも

多種多様な人種が居ることに興味を示す

「そうかレンゴクはまだマズル以外の種族を見ていなかったか」

ゼノが笑いながら問うと

「うむっ……しかし色々な人たちがたくさん居るものだ」

煉獄は答えながら自然と笑顔になる

そんな煉獄の後ろへ

マズルは隠れるようにしている

「やはりまだ慣れんよな」

ゼノは苦笑いしながらに呟いて

そんなマズルの頭をポンポンとすると

「レンゴク！　まずはサピード王に会うのじゃ。　ワシは宮廷魔術師

と付き合いがあるでの……来訪者が来たと言えばすぐに会わせてくれ

るじやろう」

煉獄へと話すとゼノはマズルの手を引き

着いてくるように促す

「サピード王……王様とやらか」

煉獄は頷いてから呟くとゼノたちに続いて歩き始める

アルサピードの街並みは煉獄にとって

初めて見るものばかりだけに視線が泳ぐ

そのため足が早い訳ではないゼノたちだが

少しばかりの人混みではぐれてしまっていた

「ふむっ……ゼノたちを見失ってしまったな。　まあ王様は一番大き

な建物に居るのだろう！　ひとまずそこへ向かうとしよう」

判断が早い煉獄にしても初めての場所などに
少し気をとられていたからなのか
ドンツ

小さな子供が煉獄へとぶつかり
すぐに走って行ってしまおう

ふと煉獄は隊服の中にあつた財布が無い事に気づく
この世界では元のお金など通用はしないが
何より財布の中に入っているある物を取り返すべく
煉獄の姿は一瞬で子供を視界に捉えるほど
素早い動きで追いかけていた

「うわっ！ 何だよ離せ」

すぐに煉獄に捕まった子供は両肩を押さえられて
まったく身動きが出来ないまま叫んでいる

「盗みは良くないぞ少年！」

煉獄は取られた財布を既に懐へと戻して話す

「うるせえっ！ こんでもしないと食いもんが無いんだ」

子供はバタバタと暴れながら叫ぶ

「ふむっ！ それは良くないな」

煉獄は呟くと子供の両肩を押さえていた手を話す

「うわっ！ 行ってえ」

急に自由の身になった子供は前のめりに倒れる

何かを考えこんでいる煉獄を見て

また子供は走り去ろうとする

しかしまたすぐに煉獄が前へと立ちはだかる

「なんなんだよ財布は返したろ」

眼前に立つ煉獄へ子供が叫ぶ

「返したでは無く俺が自分で返してもらったんだがな」

子供の言葉に煉獄が答えると

「とにかく一緒に来るといい！ 今から王様に会うから食べるものを

くれるよう俺も頼んでやろう」

「はっ？何言ってるんだ？ 王様に会う？ 簡単に会える訳ないだろ」

煉獄の言葉に一瞬キョトンとした子供だが
すぐに現実的ではない内容にケチをつける

「俺もよくわからないのだが俺の仲間が王様の仲間と知り合いみたい
でな！ だから行こう」

煉獄はそう言う一番に大きな建物である

お城へ向けて歩き始める

「何だこいつ？ 変なやつだな」

子供は憎まれ口を言いながらも煉獄の後を着いてくる

その姿を確認しながら煉獄はうんうんと頷き
笑みを浮かべながら歩いて行くのであった

あまりにも大きな建物であるお城に近づくと

煉獄はそれを見上げて満足げな顔をする

「こりゃレンゴク！ どこに行つとつた？」

聞いたことのある声が近付き

文句を言うゼノと心配そうに見ているマズルがそこに居た

「すまないっ！ 色々と見ていたら離れてしまったようだ。 しかし
再会出来たことだし問題ないな」

煉獄はゼノの言葉とマズルへ向けて笑顔で話す

その言葉にマズルは笑うと

「何を他人事のようにばかたれが！ …ん？ その子はどうした？」

ゼノは煉獄の言葉にイラツとして話し出すも

その後ろに居る子供に気づいて問いかける

「ああ…俺の財布を盗んだ子でな！」

煉獄の言葉にゼノは驚く

「なんじゃと？ 何故それで盗人の子を連れてるんだ？」

驚きながらゼノが聞くと

「盗みをしないと食べることが出来ないと言う。ならば王様に食べ物をもらえばいいと話してな」

煉獄がそう話すとゼノはあきれたように

「おまえは何を言うとする？ まったくこいつは……」

ゼノは溜め息をつきながら話す

その会話を聞いていた子供が

「ほれみろ！ やっぱり出来もしないじゃねえか」

煉獄へ向けて言い放つ

「いやまだ聞いてもいない！ 無理かどうかもわからないだろう」

煉獄は瞬時に子供の顔を覗き込むほど

近付いてその言葉に答える

あきれながらゼノはお城の門番をしている兵に話しかけ

宮廷魔術師への取り次ぎと何か食べる物をと

話しをして来るのだった

「ほれ！・ これを持ってけ。 行くぞレンゴク」

ゼノは兵が持ってきた食べ物子供へと渡すと

煉獄へと話して城内へと歩き出す

マズルも心配そうにしながら

何度も振り返りゼノに着いていく

「さあこれでもう大丈夫だな！ 人から物を盗むのは良くない。 も
うやめておくんだぞ」

煉獄はそう言うとき子供に手を降り

ゼノの後を追って歩き始める

「あつ………おいつ………あ、ありがとう！」

照れ臭そうにしながらもお礼を言う子供

煉獄はそれに笑顔で振り返り頷くと

羽織をバサツと翻して歩いて行く

子供にはそんな煉獄が

とてもカッコ良く見えたのだった

煉獄は城内へ向けて歩きながら財布を取り出し

その中にある根付けを確認する

それは大事な弟からもらった手作りの根付け

とても大切にしている宝物だけに

財布を返してもらわないといけなかったのである

来訪者と鬼人族

「王様とは凄いものだな。　こんな大きな建物の中にとっても豪華な部屋がいくつもあるとは…　うむっ！　これが派手というやつだな」
煉獄はそう言いながら

元の世界の仲間を思い出して笑う

「一国の王じゃからな。　もっと凄い部屋もあるかもしれんぞ！」

ゼノは紅茶を飲んで煉獄へ悪そうな笑顔で話す

「それは是非見てみたいものだ！」

ゼノの言葉に煉獄はすぐに反応して

大きな目を爛々と輝かせている

バタンツ

「お待ちせしてごめんなさいね！　元気だったゼノ？」

ドアを開けて入ってきたのは黒をベースとして

紫のラインが入った綺麗なローブを着た熟女

その女性が軽い挨拶をしてゼノへと話しかける

「久しぶりじゃのイース！　見ての通りよ」

ゼノは笑顔で答えるとイースという女性も笑顔で頷く

「それで彼が……」

イースはそのままゼノへと問いかけ煉獄を見る

「ああ来訪者のレンゴクだ。　こいつは凄いぜ！　魔法が使えないの

に炎を使って戦える。　何か連想しないか？」

ゼノは話しながら笑みを浮かべて

明らかに楽しそうにイースへと答える

「魔法が使えないのに炎を使うなんて魔獣やドラゴンじゃあるまいし

……!?!　もしかして炎の勇者のお話しの事を言ってるの？」

イースはゼノの言葉にハツとするも

少しあきれた感じで答えると

「ごめんなさいね二人で話してしまつて…私はイース。ゼノとは昔ながらの仲なのよ。今はこの国の宮廷魔術師として使えています。あなた…レンゴクと会うのは初めてだけれど他の来訪者とも会つたことがあるのよ！ それでこちらの可愛い女の子は？」

イースは煉獄へと話して、マズルへも微笑みかける
イースの言葉に煉獄は座つていた椅子から立ち上がり
しっかりとしたお辞儀をする

「初めまして煉獄杏寿郎です！ 俺以外の来訪者は……」

煉獄が話しを切り出そうとする

ゼノが待てと言わずの手で合図をして

「その子はマズル。鬼人族じゃよ珍しいだろう。もう既にこのレンゴクを選んでいて成長途中じゃ」

ゼノは先にマズルの話しをイースへと振る

その言葉にマズルはイースへと

恥ずかしそうにしながら煉獄のようにお辞儀をする

「この子が鬼人族？ そうなの今は探すのも大変なくらいに少なくなつてしまつたものね。まさか来訪者を相手に選ぶなんて聞いたこと無いから驚いてしまつたわ！ となると…未知の力を手に入れているという事ね」

イースはマズルを笑顔で見ながら話すと

ゼノへも笑いながら問いかける

ゼノはイースの言葉に笑みを浮かべ

フツと笑いがこぼれるも

何か言いたそうなままでいる煉獄の存在を

イースへと目で合図する

ゼノの仕草にイースは改めて煉獄へと向き直り

「レンゴクが聞きたいのは他の来訪者の事よね？ 私が来訪者に会うのはあなたで4人目。前に男女の二人と女性一人に会つた事があつてその一人の女性はあなたと同じような服を着ていたわ」

イースは優しく煉獄が聞きたかった事に答える

「同じ服？ やはり鬼殺隊の者が俺以外にも…その人たちはどこに行けば会えるのですか？」

挨拶をした後にゼノに制され

また椅子へと座り待っていた煉獄

望んでいたイースの言葉に思わず立ち上がり

少し興奮気味に話して問いかける

「そうよね気になるわよね！ レンゴクと同じことを言っていたわ。

その服は何かの団体の制服なのかしら？」

煉獄の言葉にうんうんとイースは頷き

女性には聞いていなかった共通の服について尋ねる

「これは…俺の元居た世界では鬼が人に仇なすため、その鬼を滅すために作られた鬼殺隊と呼ばれる私設団体の隊服です！ ですがこちらの世界に居る鬼とはまったく違うとマズルと出会ってわかりました」

煉獄はマズルを気にして話すも

すっかり違うと否定をして言いきる

その言葉にマズルは少し笑って煉獄を見る

煉獄はマズルを見て頷くとイースへと視線を戻す

煉獄の言葉を聞くと

イースは少し悲しそうな顔をする

そしてマズルを一度見てから

「まあ一概にそうでもないのだけどね」

イースは話しながらゼノを見る

ゼノは感じる視線に咳払いをすると

苦笑いのような表情で大きな溜め息を吐く

「それはどういう事ですか？ 俺がゼノから聞いた話しではマズルたち

鬼人族は神の使いと言われるからこそ鬼神族とも呼ばれると……」

イースの言葉に煉獄は少し戸惑い話す

その言葉にイースは無言で手をかざし制すと

「やっぱり話してなかったのね」

眩きながらゼノを見て溜め息をする

そしてまた煉獄へと視線を戻すと

「それは選ぶ相手にもよるの。鬼人族本人が善悪の区別なく選ぶのだから……そして強制的にも出来なくはないからこそ鬼人狩りのようなものも起きてしまった」

イースは話しながらマズルへと近づき

赤い角を触ってから優しく頭を撫でる

マズルは少しビクツとするも

暖かいイースの手に撫でられ

少し笑顔になっている

煉獄はイースの言葉を聞いてハツとすると

「ふむっ……つまり鬼人族には敵対するものが居ると?」

煉獄の言葉にイースは頷くと

「そう! 最悪な形でのね。仲間を殺された恨みや自分から力を求める鬼人族も居るのよ。それは力を与えてはいけない者まで強くしてしまう」

イースの言葉に煉獄はチラリとゼノを見る

ゼノは少し悲しそうな顔で

何かを思い出すように上向きの視線が遠い

「でもこの子は……マズルはレンゴクと出会い、そして自ら選んだ。

その選択が正しいか間違いなのかはあなた次第よレンゴク!」

ゼノを見ている煉獄へとイースが話しかける

「来訪者たちの事は来ているという事以外まだ何故に他の世界から来たのかも含めてわかっていないのよ。最初に確認された来訪者からももう数十年も立つというのにね! まさに神様のみぞ知る……かしら」

イースは寂しそうな笑顔で煉獄へと話す

イースの話しを聞いていた煉獄は

聞きながら考えを巡らせていた

そしてイースの話しが途切れてすぐに

「うむっ！ やはりゼノが言っていたようにこの世界に俺が連れて来られた意味が何かしらあるのだろう。それなら元の世界のように俺が出来ることをして誰かの助けやためになるならば、それがきつと俺の居る意味でありこの世界での俺の責務だ！」

煉獄の言葉にマズルが笑顔で近づき

「キョウジユロ：何かするならマズルも手伝う」

煉獄はマズルの言葉に笑顔で頷いて

優しく頭を撫でる

その光景にゼノは嬉しそうに笑みを浮かべ

イースもまた笑顔で見つめるのであった

コンコン……ガチャツ

入り口のドアが開き

二人の衛兵が入って来る

「謁見の準備が整いました！ 王様がお待ちです」

イースは煉獄たちを見て笑顔で頷くと

衛兵たちに続いて先に部屋を出て行く

煉獄もゼノやマズルを見て

「さあ王様に会いに行こうっ！」

そう言っつて部屋を出る煉獄に

ゼノとマズルが続いて出ていく

同じ頃、大きな門をくぐって

煉獄と同じ服装をした女性が城へと向かい歩いていた